

閻魔王 (えんまおう)

米水津村浦代浦養福寺にある閻魔王は、もとはヒンドゥー教の神で、名前をウマといい、夜摩・夜魔・炎魔・焰魔・琰魔・閻摩羅社・閻魔王・閻魔などと記されている。古い仏典は閻摩という文字を用いるが、中国や日本では閻魔と書く場合が多い。なお、羅社とは王のことである。

しかしながら、閻魔王は、はじめは死者の赴く楽土(天国)の王であった。ところが、後にメソポタミヤ地方から、地獄(地下の牢獄)へ堕ちるといふ考えがもたらされると、死者全体の問題を司る王、即ち、死後の裁判官の王として、地獄そのものの主宰者とみなされるようになった。

更に、仏教に採り入れられると、地獄の主宰者であると同時に、極楽へのパスポート(旅券)の発行者にもなり、地獄菩薩の化身と信じられるにいたった。

中国の道教の影響を強く受けたため、閻魔王の役人の服装は、中国風である。

インド仏教本来の伝統を現わす密教の場合は、閻魔王は焰摩天と呼ばれ、十二天のうちに数えられている。

「焰摩天曼荼羅」を見ると、地獄の住人として、次のような中国的な顔ぶれが並んでいる。まず、内院は焰摩天を中心に、左右に焰摩天妃(右の焰摩天妃は着衣、左の焰摩天妃は裸)が居り、その外院の中には五道大神(天・人・畜・生・餓鬼の五道を司る冥官)が、床の上に座り、その右側に司令(右手に筆、左手に書巻を持つ書記)、左側には司録(書巻を読む唐服姿の書記)が控え、また、その左上には荼吉尼天(人の死を半年に予知する夜叉神)、右上には遮文荼(猪頭人身で冠を頂き、高杯を持つ)。外院の上部中央には太(泰)山府君(中国の名山泰山を冥界とし、そこを支配する道教の三神)そして、左には歓喜天(象頭人身で男女交合する鬼神)右に成就仙といった面々である。

以上、眷属のほかに二天女、二鬼使者をはじめ、十八の将官と八万の獄卒がいるといわれている。最後に冥土への途中、死者が初七日に渡ると信じられている三途の川(葬頭川)のほとりに住む奪衣婆と懸衣翁について一寸ふれる。

この二人は夫婦とも言われるが、「十王経」によれば、三途の川を渡る亡者の衣類を奪い取るのが奪衣婆の仕事で、それを、そばにある衣類樹に登っている懸衣翁が枝にかけ、その枝のたわみぐあいによって、その死者の犯した罪の重量が分かるとか。

養福寺の閻魔堂は、江戸時代末期の建立であるが、県南では他に類例を見ない。また、閻魔堂の前に地藏と閻魔の同体化現説（仏菩薩が衆生を済度するために、いろいろな形を変作示現すること）に基づくものか、大きな石地藏が立っている。



参考 「大法輪」
軸丸 勇

◆編集後記

「今度は原稿の集りが悪いが大丈夫かな？」そんな心配をしながら仕事を始めたが、ご覧頂ければ分かるようにいっぱいになりました。ご協力を頂いて感謝しています。

新しい年と共に、私達は「平成」という新しい時代を迎えました。大正という年号にちょっぴりひっかかっていますが、昭和という時代を丸々生きた者には、何か感無量のもと、お叱りを受けるかも知れないが、「ああ、これで戦争も終わった」という気持がしました。

トルストイの「戦争と平和」ではないが、この二つの時代を生きた私にとって、今、改めてそのことを振り返ってみたい気持でいっぱいです。

先日、男はつらいよ「寅次郎サラダ記念日」を見ました。いろんな今目的問題を含んでいて大変面白く見ました。その中で、寅次郎の甥が

「伯父さん。どうして学問をしなければいけないの」と聞くのに対し、

「それはよう。何か困難なことに出会ったとき、伯父さんのように学問をしていないと、どうしていいか分からないだろう。困難に耐え、どうしたらそれを乗り切れるか考えることが出来るようになるための勉強よ」

ちょっといい言葉でした。私事で申し訳ありませんが、私が四十を過ぎて大学で学ぼうと思ったのも同じような気持でした。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。

後藤 知久